

渡部昇一著「国民の教育—精読が生み出すもの—」扶桑社 2001年11月10日刊を読む

精読が生み出すもの

1. (1)①漱石が好きだと言う荻生徂徠の場合も、その文章の趣味は精読、つまり同じ本を反覆して読むことによってつくられたのである。
 - ②この徂徠の父の荻生方庵おぎゆうほうあんは医師として徳川綱吉とくがわつなよしにつかえていたが、その綱吉が館林たてばやしへ分国ぶんこくになったとき、方庵は陪臣ばいしん(将軍の家来の家来)になることを残念に思って、願いを出して幕府に帰ったのである。
 - ③ところが4代将軍に跡を継ぐべき子どもがなかったため、その綱吉が5代将軍として館林から江戸に出てきた。
- (2)①当然のこととして方庵は不忠者ということになり上総国かずさのくに(千葉県)長柄郡二宮庄本能村ながらにのみやしやうに流罪るざいになった。
 - ②徂徠が14歳のときのことである。
 - ③ここは今の茂原市もばらの西に当たるところだそうであるが、当時は田舎で、本もろくになければ先生もいなかった。
- (3)①たまたま『大学諺解だいがくげんかい』が1冊あったので、これを繰り返し繰り返し読んでいたという。『大学諺解』という本は林羅山が仮名書きで『大学』の説明をしたものという説もあるが、異論もあってどんな本だったかわからない。
 - ②それを暗記してしまうと、もうやることがない。それで、この本を横にも書けるようになったと言われている。
- (4)①もちろん縦書きの本を横に書けるようになったというのは徹底的に暗記したことを誇張したものだろうから文字どおり受け取る必要はない。
 - ②しかし少なくとも徂徠には先生もなく、同級生に相当する同じ年ごろの勉強仲間もなく、本もごく少ししかなかったとは言えると思う。
- (5)①このような恵まれない環境にあって徂徠は何をやり始めたのであろうか。
 - ②それは手持ちの限られた本を徹底的に精読し始めたのである。
 - ③わからないところがあっても教えを受ける先生はない。文字どおり百ぺんも繰り返して意味きとを暁さとったのであった。
- (6)①それこそ読む本を初めから終わりまで暗記してしまったのである。
 - ②暗記したからといって別の本を借りるところはないのだから、また同じ本を読むのである。
 - ③そこで最後にはやることがなくなって、『大学諺解』は横にも書けるようになった、などという伝説も生じたのであろう。
- (7)①こうしながら10年ばかり田舎にいたのであるが、徂徠が25歳になった元禄3年に父ゆるが赦されたので江戸に帰ってきた。

②そして帰ってきたときは、すでにそのへんにいる学者を圧倒する実力を持っていたのである。

(8)①このように、テキストを正確に読む力があつた彼が、間もなく日本の古文辞学派の創始者になつてもおかしくはない。

②徹底した精読は表現の微細な相違や文章の質の微妙な変化にも鋭敏に反応する感覚、あるいは趣味をつくるのである。

③漫然と次から次へと本を読むだけでは得られぬものが得られるのだ。

(9)①漱石も幼いころはあまりほかの子どもと遊ばずに、土蔵の中で自分の好きな本を読み、好きなことを考え、自分だけの世界と自分だけの鋭敏な読書センスを作り上げていったのであつた。

②だからこそ子どものときからすでに徂徠一派の漢文と、別の派の人たちの漢文の質が違っていることを感じとれるようになっていたのである。

<コメント>

夏目漱石は、江戸時代の思想家である荻生徂徠の文章が好きで書き写した。その荻生徂徠はどのように文章を身に着けたのか。渡部先生から学ぶことは大きい。御参考になさってください。

2021年11月26日 林明夫記